

ボスニアを蝕む 戦争の後遺症

人々は医療援助を求めている

激しい内戦で破壊されたのは、国土だけではない。医療施設も人材も失った。薬など医療物資も足りない。日本の民間団体にも、支援要請がきているのだが……。

「セルビア人は悪者」というイメージが世界中に広がった。外国からの救援物資は、ほとんどこちらに入っていない。支援の目が向けられるのはサラエボばかりだ」

昨年末の和平協定発効で誕生したセルビア人共和国（セルビア人勢力）にある、バニャルカ大病院のランコ・スクルビッチ医師は、こう不満を訴える。ベッド数千六百。医師二百七十六人、医療関係者千三百人が働く大病院だ。

北西部のバニャルカは戦場にはならなかったため、病院の建物や施設に破損はなかったが、新しい医療機器、注射器などの器具類、医薬品などの補充は十分ではない。例えば、循環器系では、記録

用紙がなく心電図検査もできないし、心臓エコーも技術者が不足しており、高価な検査機器は「宝の持ち腐れ」状態で、役立っていない。

民族対立のしこり残る

「麻酔機器などは古いですね。あえて言えば、日本の医療レベルから十年は遅れています」

と、大腿骨折手術に立ち会った深谷幸雄医師はいう。岡山市に本部を置く民間の国際医療援助団体「アジア医師連絡協議会（AMDA）」のメンバーで、バニャルカ大病院とボスニア連邦（モスレム人とクロアチア人両勢力）のサラエボ大病院の支援要請を受け、今年一月下旬から二月にかけて今後の医療協力に向けた予備調査のために現地入りしていた。

バニャルカ大病院では戦争中には、人工透析液が不足し患者十七人が死亡。酸素供給が停止し、

十二人の新生児も死亡した。医学部長で、小児科医のリリアナ・ホティッチ女医は、「戦争中、外国から新しい医学情報も入ってきませんでしたし、医学専門雑誌も不足しています。十分な教育もできないのが現状です。どんな医学書でもいいですから欲しい」と、医学教育面での支援も訴えている。

国連難民高等弁務官事務所（UNHCR）職員の見学。パンダリ医師の案内で、バニャルカの西方四十キロの難民センターを見た。子供、女性と老人ばかり三百二十人のセルビア人難民が避難生活を送っている。

「食糧、燃料、毛布などは、赤十

サラエボ市内の難民センターで暮らすモスレム人の一家。セルビア人勢力下から逃げてきた。「十分な医療と落ちついた生活がほしい」と、願いは切実だ



サラエボで破壊されたサラエボの図書館。貴重書も焼失してしまっ



パニャルカの西方40kmの難民センターには、モスLEM人勢力下から逃れてきたセルビア人たちが暮らしている。衛生状態はどこも劣悪だ

宇国際委員会（ICRC）やUNHCRの援助です。医師は週に一回、看護婦は一日一回巡回がありますが、急病人が出たときに、病人を搬送する手段がない」と、バンダリ医師は問題点を指摘する。

難民センター責任者のクネジェビッチ・チェドミールさんも、同様に避難生活の困窮を訴える。パニャルカ市内で息をひそめるようにして少数のモスLEM人、クロアチア人が暮らす。

市内にあった二十二のモスクがすべて破壊された」とバンダリ医師。そのうち、二カ所、現場を見て回った。説明を受けなければ、以前にモスクが建てていたとは判別できない。モスLEM系NGO（非政府組織）メルハメットは、机一つの小さな診療所を開設し、モスLEM人、クロアチア人の診察・治療を行っている。薬品はMSF（国境なき医師団）が支援しているが十分でないという。モスLEM人とわ

かると、治療を拒否するセルビア人医師もいるという。隣接のモスLEM人救援センター前では、約三十人が寒さにふるえながらUNHCRの食糧配給を待っていた。三年半、戦時下にあったサラエボ大学病院の輸血センター所長ミドハト・ハラチッチ医師によると、戦争中、サラエボ大学病院で十二万人が治療を受け、そのうち

六万五千人が重傷、一万二千人が死亡という。病院の建物にも、砲弾の跡がいたる場所に残っている。ガラス窓は砲撃と衝撃波によって割れ、UNHCRのロゴとマークの入ったビニールシートで仮補修されているが、冬のサラエボは寒さが厳しい。病室に冷たい隙間風が吹き込む。小児科病棟に入院している子供の大半は肺炎などの呼吸器系統の病気だ。家庭では暖房も十分でないのがサラエボの現状だ。砲弾などで負傷した皮膚欠損の患者も多数入院している。「現在、義足を待っている人は五百人いるが、リハビリテーション施設が一つしかない。ベッド数千七百人。医師は六百人。医師の人数としては十分だが、専門医が不足している。外来患者は日に六百人から八百人います」と、ハラチッチ医師は続ける。サラエボ大学病院からのAMDAへの要望は、形成外科、泌尿器科、放射線科、麻酔科の専門医の派遣。胃腸スコープ、心電計など最新医療機器から注射器、手術台、病院の建物補修工事に行たる。その総額は、ざっと八十二万ドイツマルク（約六千万円）する。AMDAは、「顔の見える医療支援」を目指している。近藤裕次事務局長は、「夏ごろまでには、二、三チーム、なんとか現地派遣したい」というが、思うように支援資金が集まらないのが現状だ。ボスニア・ヘルツェゴビナ（ボスニア連邦とセルビア共和国で構成）にはまだ、日本のNGOの活動はほとんどない。サラエボでは、戦争中から欧州系を中心に多くのNGOが支援活動を展開、現在も六十余りの団体が活動中だ。医療面でいえば、緊急医療支援の段階は終わり、今後は、専門的な長期の医療支援が求められている。

支援資金が集まらない

文と写真・報道写真家 山本将文